

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：27101
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2023
課題番号：18K12311
研究課題名（和文）20世紀中国小品文の多角的研究：紙上の声の形成・定着に見る越境性とモダニティ

研究課題名（英文）A Multi-Perspective Study of 20th Century Chinese Familiar Essay -- Cross-borderness and Modernity in the Formation and Establishment of the colloquial journals and textbooks

研究代表者
鳥谷 まゆみ（TORIYA, Mayumi）
北九州市立大学・外国語学部・教授

研究者番号：00580507
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究によって、20世紀に中国小品文が教育、文学、出版の発展に伴って、広く青少年少女に浸透し活用されたことが明らかとなった。中国では、日本小品文にみる青少年少女の習作といった特徴のみならず、近代教育の一環としての国語教育にも活用され、それを受けた彼らは校内誌や雑誌の投稿欄に投稿して、その写実描写の正確さや内容の面白さを他者と競った。青少年少女は主体的に自らの内面を表現しては他者の内面にも思いを寄せるようになり、いっぽう、大人も若者の思考を知りうるようになったのである。小品文の著者の中には、教師や文学者、政治家として活躍する者も出てきた。中国小品文が社会や文化、人々に与えたインパクトは小さくない。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、中国の多様な領域で漠然と用いられてきた用語「小品文」のひとつに日本小品文が直接関係していたことを端緒として（鳥谷2013）、それが20世紀中国の文学、教育、出版メディアの発展に伴って、広く青少年少女に浸透し活用されていたことを明らかにした。その越境的特徴は、まさに現代中国の「近代」の歩みのひとつを示唆するものである。しかしながら、中華人民共和国の誕生とともにそれは突如として姿を消すこととなった。本研究によって、埋もれつつある20世紀中国の近代化のひとつの様相に光を当てたと見えよう。また、日本小品文が広く東アジアに伝播した可能性を示した点においても学術的意義は小さくない。

研究成果の概要（英文）： This study reveals that in the 20th century, the Chinese Familiar Essay were widely disseminated and utilized by boys and girls, along with the development of education, literature, and publishing. In China, not only were they characterized as studies of their writing, as in the case of the Japanese Familiar Essay, but they were also used in Chinese language education as part of modern education, where they were submitted to school magazines and journal submissions, competing with others in terms of accuracy and interesting content. Boys and girls began to express their own inner worlds and to think about the inner worlds of others, while adults also came to know the thoughts of young people. Some of the authors of these essays became teachers, literary figures, and politicians. The impact of the Chinese short stories on society, culture, and people is not small.

研究分野：中国現代文学

キーワード：小品文 中国 口語文 中華民国 日本 国語教科書 投稿雑誌

1. 研究開始当初の背景

本研究では、教育・出版メディア・文学形式という多角的視座を導入し、日中の新文学時期にそって出現した「小品文」を対象に作品の調査、収集のうえ分析を行って中国文学の流れを再検討する。本研究は、大正日本で出現し流行した文学形式のひとつである小品文が、日本留学経験を持つ知識人によって中国に持ち込まれ、多様な領域で活用されたという発見を端緒としている(鳥谷 2013)。出現当初、言文一致運動の最中において日本小品文は少年少女らの習作を意味した。国語教育や投稿雑誌、文章指南書の流行によって小品文は若年層を中心に浸透し、運動の衰退とともに自然消滅した。いっぽう、中国では1920年代に国内に持ち込まれて以降、新文学運動を背景に日本とほぼ同様の経路で流行した後、教育、出版、文学の領域において中華民国期に活用され続けた。日本では言文一致運動の衰退とともに自然消滅したのに対して、中国では中華民国期になぜ実践され続けたのだろうか。本研究では、両者の発展の様相を多角的な視座から比較検討のうえ中国現代文学史を問い直す。従来注目されることがなかった中華民国期的小品文作品を調査、収集のうえ分析を加えて中国現代文学史を再検討する。

2. 研究の目的

「1. 研究開始当初の背景」に記載した如く、本研究は中華民国期の「小品文」を対象に、小品文作品を調査、収集、さらに分析を加えることによって、中国現代文学史を問い直し、中国における近代化の歩みのひとつとして、その独自性を明らかにすることを目的とする。中国では五四時期、革命文学、「小品年」にみる小品文の盛行を経て、小品文は中国の少年少女にいかにか受容され、実践されたのだろうか。また、彼らは小品文に何を託して、それを継承したのだろうか。本研究では、民国時期の小品文が近代の歩みを加速した中華民国期において、人や社会に支えられて定着してゆく諸相を、国語教材内での「小品文」採用や、文芸「副刊」などの出版メディアの小品文コラム(読者投稿欄)に掲載された作品を調査、収集して、さらに分析を行うことによって明らかにする。

3. 研究の方法

本研究は、主に教育と出版メディアの二つの視角から、小品文創出の相互関連性を分析する。対象とする文字テキストは、1)国語教科書と2)文芸雑誌である。それぞれの方法を以下に列挙する。1)国語教科書:「小品年」(1934)と称される小品文流行前後の国語教科書に掲載された小品文の特色を調査・収集し、分析を行う。分析の観点は以下のとおり。作者の傾向、読者の傾向、作品の文学的魅力、時局との相互関連性。以上の分析を通じて、1934年前後の国語教育における小品文の活用の実態と作品の特色を明らかにする。調査対象の場所、および数量は以下のとおり。日本:立命館大学図書館所蔵の『中学語文』等41冊、国会図書館所蔵の教科書98冊。中国:中国国家図書館所蔵の89冊。春暉中学(浙江省)をはじめ民国期創立の重点中学にも直接赴いて可能な限り収集する。中国古書サイト「孔夫子」出品の、国語教科書を中心とした古書も可能な限り購入する。

2)文芸雑誌:「小品年」前後について、新聞メディアについても基本的に国語教科書と同様の観点から分析を行う。調査対象は次の通り。「小品年」以前:春暉中学・立達学園および重点中学50校の学校新聞、『中学生』(1930-33)の読者投稿欄、「小品年」以後、『中学生』(1934-)の読者投稿欄。ほかにも、北京大学図書館「旧刊物室」所蔵雑誌の読者投稿欄を現地にて調査する。中国研究者の協力を得ながら可能な限り、各大学のデータベースも活用する。

以上、本研究は中国における小品文作品の調査、収集を前提に分析を行う。

4. 研究成果

「3. 研究の方法」に記載のとおり、本研究は中華民国期の少年少女が手がけた「小品文」と称された短文を主たる対象に、中国の投稿雑誌や国語教科書を調査し、その作品を収集することを重要な柱のひとつとしている。しかしながら、採択2年目にあたる2019年より世界中でコロナウイルスが流行したため、本研究の肝である現地での調査、資料の収集の実施は物理的に不可能であった。感染症の終息をにらみつつ、研究実施期間の延長に加えて、研究計画の大幅な変更を行うことにより、本研究の進展をはかることとした。以下に、年度ごとの研究成果などを記したい。

2018年度:国際シンポジウムで3回、国内で開催された研究会で2回、研究発表を行い、3本の論文を執筆した。例年とは異なり、本年度、全ての国際シンポジウムが日本国内で開催された。そのため、本年度、海外への出張は行わなかった。「研究実施計画」に記した通り、本研究における調査の実施は、国際シンポジウムに参加する際、なるだけ現地で並行して実施することになっている。調査の過程で、小品文作家と称され、現代中国において「漢奸」文人と定義された周作人が、日中戦争期の1941年に日本を公式訪問した際の資料を偶然発見した。少年少女が小品文を執筆するために、手本としたのが周作人小品文であった。彼の小品文は、中国において中高生の国語教科書に繰り返し収録された経緯がある。この周作人研究

は、本研究課題の内容と同一系譜上に位置づけることが可能であるため看過できない。当該年度に実施した研究によって、周作人研究の空白部を補完するに至った。

2019年度：国外で**1**回、学術講演会を行った。講演会の内容は、小品文作家・周作人と、小品文教育家・夏丏尊についてである。国内で開催された研究会で**1**回、研究発表を行い、**4**本の論文を執筆した。本来、年度内に武漢大学で**1**回、北九州市立大学で**1**回国際ワークショップを開催する計画であったが、コロナウイルス感染拡大の影響のため、急遽中止せざるを得なくなった。しかしながら、感染症拡大以前の現地での講演会において、中国の研究者たちとの意見交換を実施できたことで、次年度以降の研究計画の見直しおよび変更が滞りなく行えた。

2020年度：周作人の最新研究書の書評**1**本、国際学術シンポジウムの報告書**1**本を執筆した。予定していた海外渡航ならびに国内出張の中止が相次いだため、大幅な研究計画の変更を余儀なくされたが、勤務校でオンラインにて国際シンポジウムを開催できたことは大きな成果である。シンポジウムでは、小品文を含む文学形式のほか、翻訳、ジェンダーなど幅広いテーマを設定して、国内外の研究者諸氏と議論を実施した。コロナ禍のさなか、中国研究者とのネットワークを構築することができた意義は小さくない。本研究の肝である現地での調査、作品の収集が実施可能となれば、中国の研究者から積極的な協力をうることができるだろう。

2021年度：国際シンポジウムでのコメンテーターを**1**回務め、論文**1**本を執筆した。本研究の調査の過程で発見した周作人の新資料を基に執筆した論文を中国語翻訳したものである。当該論文の電子版を**HP**や**researchmap**で公開して、中国からもアクセスできるようにした。これにより、中国研究者との、より活発な意見交換が期待される。予定していた海外渡航ならびに国内出張の中止が相次いだため、前年同様に大幅な研究計画の変更が必要であった。本年は、試みとして感染症の抑え込みに成功している台湾を研究対象のエリアに加えることとした。国際シンポジウムにおいて、コメンテーターを務めると同時に、台湾話文詩（口語詩）に関する若干の報告を行った。

2022年度：書評**1**本を執筆し、論文の合評を**1**回行った。前年度同様に大幅な研究計画の変更が必要であった。前年度からの試みとして感染症の抑え込みに成功している台湾を対象エリアに加えて、データベースを活用して台湾小品文の入手を開始した。台湾での調査も計画したものの、勤務校におけるコロナの影響による渡航制限が長期化したため、渡航には至らなかった。

2023年度：研究報告書**1**本を執筆し、国内学会発表を**2**回行った。さらに、小品文作家周作人と深い関係を有する人物であり、また、『周作人先生のこと』（**1944**）の編者でもある方紀生について、その子孫と共同で所蔵資料の整理を実施のうえ、武者小路実篤との書簡といった、貴重文物の展示会を勤務校の図書館ギャラリーにて約一月間開催することができた。方紀生という在日中国人が、戦争前後に著名な日本文学者と継続的に交流していた実態は従来ほとんど知られていない。**20**世紀の日中文人の交流の一面を、広く社会に紹介することができたのではないか。研究者をはじめ多くの市民の参観があったことは補足しておきたい。

以上が本研究の成果である。研究計画の大幅な修正を余儀なくされながらも、本研究の実施によって、**20**世紀に中国小品文が教育、文学、出版メディアの発展に伴って、広く少年少女に浸透し、活用されたことが明らかとなった。中国においては、日本小品文にみる若者たちの習作といった特徴のみならず、近代教育の一環として私立中学を主とする国語教育にも活用され、また、その教育を受けた少年少女は校内誌のほか、『中学生』（**1930**）創刊以降に投稿欄に投稿してその写実的描写の正確さや内容の面白さを他と競うようになる。こうして少年少女たちは、自分の内面を正確に表現しては、他者の内面にも思いを寄せるようになったのであり、いっぽうの大人たちも少年少女たちの思考を直接知りうることとなった。小品文の若い書き手たちの中には、成人後、教師や出版人、さらに文学家、政治家として活躍する者も出てきた。**20**世紀における中国小品文が中国社会や人々に与えたインパクトは小さくないのである。

本研究は延長と計画の大幅な見直しを経て完了した。ここではその副産物とも言うべき、研究成果についても些か整理して記しておきたい。調査の過程で周作人に関する新資料を発見したことによって、周作人研究の進展に寄与することができた。また、オンラインながらも国際シンポジウムを主催して、コロナ禍にあっても国内外の研究者と交流できたことはその後の計画の見直しや研究を滞りなく実施するためにも重要な成果のひとつである。そのほか、展示会を開催して、方紀生研究の進展に寄与できたことも収穫であった。特筆すべきは、本研究の実施によって中国に続いて台湾にも日本小品文が伝播した可能性を示唆する作品を発見できたことである。コロナ禍でも粘り強く、諦めずに本研究を継続してきたからこそその成果と言えよう。今後の研究に繋げたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 鳥谷まゆみ	4. 巻 第110号
2. 論文標題 合評：汪憶菲「 ” 小さな野蠻 ” の文学 周作人の児童観形成における「反復説」の意義について」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『野草』	6. 最初と最後の頁 166-170
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鳥谷真由美(鳥谷まゆみ)	4. 巻 153号
2. 論文標題 「漂泊的自我認同 従周作人再訪立教大学時的新史料談起」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『北九州市立大学外国語学部紀要』	6. 最初と最後の頁 P255-283
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 鳥谷 まゆみ	4. 巻 94巻
2. 論文標題 書評：小川利康著『叛徒と隠士 周作人の一九二〇年代』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『現代中国』	6. 最初と最後の頁 pp117-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鳥谷 まゆみ	4. 巻 第1号
2. 論文標題 「国際学術シンポジウム〈言文・身体・性 20世紀東アジア文学における越境と葛藤〉」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 北九州市立大学地域戦略研究所編『北九州市立大学地域戦略研究所年報2020年版』	6. 最初と最後の頁 pp141-143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鳥谷まゆみ	4. 巻 667
2. 論文標題 【魯迅の描く女性像】「少女から母へ 「傷逝 涓生の手記」を読む」（特集【魯迅の描く人物像】）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『立命館文学』（宇野木洋教授退職記念論集）	6. 最初と最後の頁 28 - 36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鳥谷まゆみ	4. 巻 93
2. 論文標題 周作人「美文」小攷：明治末期の日本文学を材源として（20世紀東アジア：越境する文学形式と思考の流動）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『神戸市外国語大学外国学研究』	6. 最初と最後の頁 95-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 川辺比奈・鳥谷真由美（鳥谷まゆみ）	4. 巻 55
2. 論文標題 「方紀生的事：『周作人先生的事』之編輯及奉獻給中日文化交流的一生」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『文化論集』（周作人国際シンポジウム特集号）	6. 最初と最後の頁 127-169
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 鳥谷まゆみ	4. 巻 104
2. 論文標題 [書評]中村みどり「日本占領下上海における陶晶孫の言説：大東亜文学者大会と「老作家」・「狗」」（『野草』第102号合評）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『野草』	6. 最初と最後の頁 100 104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鳥谷まゆみ	4. 巻 50号
2. 論文標題 漂泊のアイデンティティ：周作人の立教大学訪問時における新史料から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『中国21』（特集 中国近現代の知識経験と文学）	6. 最初と最後の頁 173-196
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鳥谷真由美	4. 巻 なし
2. 論文標題 流動的“文化”想像：从周作人1941年訪日時新資料談起	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国際学術ワークショップ「中國近代知識經驗與文學表述」会議論文	6. 最初と最後の頁 別刷りのため頁数無し
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鳥谷真由美	4. 巻 なし
2. 論文標題 漂泊的自我認同 从周作人再訪立教大学的新資料談起	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 「第一回周作人国際学術シンポジウム：基本資料の発掘と整理」会議論文	6. 最初と最後の頁 別刷りのため頁数無し
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 6件）

1. 発表者名 鳥谷まゆみ
2. 発表標題 合評：汪憶菲「『小さな野蠻』の文学 周作人の児童観形成における「反復説」の意義について」
3. 学会等名 中国文芸研究会11月例会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鳥谷まゆみ
2. 発表標題 「紙上に響く台湾語のうた」
3. 学会等名 国際シンポジウム「文学文脈声の痕跡ー20世紀東アジアにおける言説の輻輳性」(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 呉世宗、津守陽、梁艶、魏辰、裴亮、波瀾剛、鳥谷まゆみ
2. 発表標題 「言文・身体・性：20世紀東アジア文学における越境と葛藤」(総合討論)
3. 学会等名 「言文・身体・性：20世紀東アジア文学における越境と葛藤」(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鳥谷まゆみ
2. 発表標題 合評：中村みどり「日本占領下上海における陶晶孫の言説：大東亜文学者大会と「老作家」・「狗」」
3. 学会等名 中国文芸研究会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鳥谷真由美(鳥谷まゆみ)
2. 発表標題 「文体越境：：1920年代中国小品文的形成與日本」
3. 学会等名 武漢大学文学院(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鳥谷まゆみ
2. 発表標題 好意と反感のはざまで 淪陥期における周作人の沈黙と「打油詩」
3. 学会等名 第五回国際学術ワークショップ「20世紀東アジアにおける帝国と文学」(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鳥谷まゆみ
2. 発表標題 淪陥期における周作人の打油詩に関する一考察
3. 学会等名 中国語圏地域人文学研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鳥谷まゆみ
2. 発表標題 好感/反感のあいだ：日本占領時期周作人の翻訳活動に関する一考察
3. 学会等名 中国モダニズム研究会12月研究例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鳥谷真由美(まゆみ)
2. 発表標題 流動的“文化”想像：从周作人1941年訪日時新資料談起
3. 学会等名 「中國近代知識經驗與文學表述」国際学術ワークショップ(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鳥谷真由美 (まゆみ)
2. 発表標題 漂泊的自我認;同 从周作人再訪立教大学的新資料談起
3. 学会等名 「第一回周作人国際学術シンポジウム：基本資料の発掘と整理」(国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>「1月24日(日)に国際学術ワークショップ(オンライン)を開催します。」 https://www.kitakyu-u.ac.jp/news/2021/01/002089.html 「第一回周作人国際学術シンポジウム：基本資料の発掘と整理」ポスター https://researchmap.jp/?action=cv_download_main&upload_id=192733</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	津守 陽 (TSUMORI Aki)	京都大学	
研究協力者	裴 亮 (PEI Liang)	武漢大学	
研究協力者	梁 艶 (LIANG Yan)	同濟大学	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 国際学術シンポジウム「言文・身体・性 20世紀東アジア文学における越境と葛藤」 (北九州市立大学におけるオンライン開催)	開催年 2021年～2021年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------